

## 帝国大学理科大学の調査資料にみる津波記録・伝承

蝦名 裕一\*(東北大学災害科学国際研究所)・佐竹 健治(東京大学地震研究所)

### § 1. はじめに

東京大学地震研究所所蔵「地震学及地理学研究材料 測候所郡役所組合事務所報告」(以下、報告では「地震・地理学材料報告」とする。)には、帝国大学理科大学が1893年(明治二十六年)に各地の郡役所・村役場などに歴史地震・津波および海底地形変動に関する情報の報告を編纂したものである。同史料は、羽鳥(1976)において分析されている「静岡県地震報告 其二」と同様に、①「海嘯」に関する口碑・記録の報、②50年以内の海底変動について回答したものである。すなわち、両史料は本来同一のものであったものが分割して保管されていたものとみられ、帝国大学理科大学の同調査は全国規模で展開されたものと考えてよい。

本報告では、「地震・地理学材料報告」に収録されている内容を分析し、歴史津波についての新たな情報を得ることとする。

### § 2. 「地震・地理学材料報告」の回答地域と歴史津波情報

No.	都道府県	年月日	内容	該当する歴史津波
1	北海道	寛保元年(1741)7.19	海嘯	1741渡島噴火津波
2		天保14年(1844)12.26	地震・海嘯	
3		嘉永元年(1848)8.27	風雨・海水溢漲	
4	岩手県	安政3年(1856)7.25	雷雨・大地震・大津波	1856安政八戸沖津波
5		安政3年(1856)7.23	地震・海嘯	1856安政八戸沖津波
6	福島県	延宝4年(1676)10.9	津波	1677延宝房総沖津波
7		天保年間(1830-1844)	海嘯	1835天保宮城沖地震
8	千葉県	明応7年(1498)8月	大地震	1498明応地震
9		慶長19年(1614)10.25	津波	
10		延宝5年(1677)10月	津波	1677延宝房総沖津波
11		元禄16年(1703)11.23	大地震・海嘯	1703元禄地震津波
12	千葉県	天保4年(1834)8.1	暴風・海嘯	
13		安政1年(1854)11.4	大波	
14		安政2年(1855)10.2	大震災・小海嘯	1855安政江戸地震津波
15		安政3年(1856)8.25	暴風・海嘯	
16		明治26年(1893)9.8-9	小海嘯	
17	富山県	天保年間(1830-1844)	激漕	
18		安政5年(1858)2.24	激震・海水襲来	1858飛越地震か?
19	三重県	安政元年(1854)10.4	大地震・大津波	1854安政東海地震津波
20		明治22年(1889)9.11	暴風雨・海嘯	
21		明治24年(1894)10.28	暴風雨・海嘯	
22	香川県	情報なし		
23	愛媛県	安政元年(1854)	地震・海水変動	1854安政東海・南海地震津波
24	山口県	安政元年(1854)	水位変動	1854安政東海・南海地震津波
25	長崎県	情報なし		
26	宮崎県	安政元年(1854)11.3-5	地震・津波	1854安政東海・南海地震津波
27		安政2年(1855)	津波	
28		安政3年(1856)	津波	
29	鹿児島県	情報なし		
30	沖縄県	明和8年(1771)2.10	海嘯	1771明和八重山地震津波

【表1: 「地震・地理学材料報告」の回答地域と歴史津波情報】

「地震・地理学材料報告」に収録されている回答地域と記載されている海嘯の情報と、これらに対応する歴史津波についてまとめたのが表1である。各地の報告内容をみると、津波のみならず高潮や暴雨風による被害についても記載されており、当時において津波＝「海嘯」とみなす定義が定着していなかったことが伺える。

報告内容をみると、その大半は口碑伝承であり、古記録の調査を実践している場所は多くは無い。古記録に基づいた調査としては「北海道志」(No.1)、No.7「蓮乗院過去帳」(No.7)、「田中玄蕃所蔵ノ文書」(No.8-9※『新修日本地震史料』では「玄蕃先代集」と表記)、「八重山島日記」(No.30)などの調査が実施されている。

### § 3. 「地震・地理学材料報告」にみる新たな津波痕跡地点

「地震・地理学材料報告」に掲載されている口碑伝承から新たな歴史津波の情報を見いだしておきたい。

福島県檜葉・標葉郡役所(現双葉郡)から提出された報告書には、天保年間(1830-1844)の海嘯により、檜葉郡木戸村山田浜の宅地が水没したため住民を移住させたとある。また、山田浜上ノ代の調査当時の住民は、北田村東浜のかつて脇浜村と呼ばれた場所から移住したと伝えられている。その理由は「慶長年間海嘯ノ為メ脇浜村全地滅没セシ旨旧記等二伝載アル」と記されている。

慶長年間、天保年間にこれらの伝承と該当する津波として津波としての可能性があるのは、1611年(慶長十六年)に発生した慶長奥州地震津波、1835年(天保六年)の宮城県沖地震津波である。いずれも現在の研究において、1611年津波および1835年津波の痕跡地点としては南端となる。

### § 4. おわりに

「地震・地理学材料報告」は口頭伝承が多数であるため、他の史料との比較検討が必要となる。例えば檜葉郡脇浜の伝承は単独の津波である可能性もあるが、「玄蕃先代集」に1614年(慶長十九年)10月25日に銚子に津波が入ったと記している。これらの地点を1611年津波の痕跡地点として加えると、その地震規模はさらに大きくなる可能性がある。今後、さらに検討を加えたい。

\*謝辞:本研究は平成29年度東京大学地震研究所「地震・火山噴火の解明と予測に関する公募研究」共同利用研究の成果の一部である。